16-20
||
1
( )

郊外銀座風景

江南文三

中野 江藤製

10—20

その頃の或冬の午後五時。どろどろの泥を[illegible]ぶちぬんだ川のやうな、大東京郊外の銀座と言ふ三間道路。燭光の強い電燈がどろどろの泥に反射して暗の中に踊るので、店並と店並との間は実際よりも遥に暗く見える。自[illegible]車が通過する度ごとに、雑巾を手にした小僧さんがお客のかける腰かけの脊やがラスト戸にはね上げられた泥を拭き取って居ます。

泥の中を歩いて来るのは市中の何處かで月

給を頂戴して親や妻や子を養ってゐる人造です。膝のあたりまで

二本の脚づぼんの代

形を作して

ゐないゴム引の大きな袋の中に空っぽんで泥海を渡って来ます。袋のよごれない處だけは黒くいやにてらてらして、電燈の光を反射させて居ます。

泥の上に

踵の高いよごれた短靴から脛まで泥みれにして、そんでも威厳を落さうとしない頼もしい女性も来ます。

行きの二尺以上もありさうな、振が膝より
も二三寸も低い、借着のやうな、むくむくば
の丸い肩を、裏返しにしたやうな高の
に拡へた襟巻でくるんで、思ひ切つた脚力で
締めつけた人も来ます。
昔、自由な時代に、家の鎖から
離れて、明るい日の下の廣い空氣の中に朝毎
に飛んで出る男達を羨んでゐた女達に、その
憧れてゐたものが與へられた時には、既に男
の毎朝の行く先は一世紀前とはまるで違つた

奴隷服役場となってゐたので、今までの憂の女王達が三度三度糠味噌で磨き上げた美しい手で丹念に縫ひ上げた着物のかばりに、觸ったゝ絹布かばりばりと悲鳴を上げて、地獄のうどん粉を散らさうと言ふ指の尖を、大切に手袋のなかに隠して、焼跡の金拾ひに関西から来た馬車馬を御する御連中と一處に、百貨店で縫はせなければならない仕儀となったのでせう。

そして、このだん袋の中に裏まれた肉塊は、
まるうちに蝕んだ肺と、下がった大きな胃
袋と、二つ折になった腸の下まで
脾臓と、黴菌のあばあばと、弾力を失った子宮と、
と、
毎日の乗物の動揺で毎朝苦苦に虐待された腎
臓とを、辛じて、年の若さに尻押しをさせて、
朝毎の込み合ふ電車まで運んで行くのでせう。
そして、多くの背廣服の、某っ葉服の奴隷と
同じやうに、一度や或は昔の人や最

中野江藤製

近までの中流の人の楽しんでゐた自由の本體を見たことがないのでただただ羨りかつて、

[illegible]角違ひの[illegible]の中、大学生の筆や口の達者なお坊様方の海老[illegible]に持つて御出になる智[illegible]

恵[illegible]遊びの道具[illegible]も、大家庭用の玩具をほしがつて[illegible]

[illegible]居るのでせう。

斯う言ふ女達のあとからは、何でもかでも知つてゐる都會人に、服裝の價ぶみをする眼に、疾走する自働車に、出勤詰に、帽子かけ

に、交通巡査の手にかいぢめられ、突当られ、押し退けられ、足を踏まれて怒り、いらいらしたり、おどおどしたり、たりした顔の色が年の割にうすい男達、すべてのものを赤の他人としてしか考へられなくなったり青くなって了った膝の痛む男達が浮山に、一人と一人きりのお愛たい苦笑ひなどをすると、ものはなく、葬列のやうに粛粛と旦つ黙黙として通って行きます。

愉快な一むれ。その中をよろよろとよろけ

て縫って行く一群。これが今の世の中で私の一番好きな一むれです。彼等だけが苦わらひでなく、御世辞笑でなく、やけ笑ひでなく、ほんとうの笑を笑ふことを知つてゐます。私共の考えたのも御存知ない智恵者が學問勉強のそのために力でいろいろとうまいことを言つてくれます。

一むれは青唐服などの飲めない酒を毎晩飲んで、また御出でよと背中を叩いて貰へます。

彼らの背中を叩く家は郊外銀座に昨

中野 江藤製

年頃から急に殖えました。

一體を言へと、此町はかりでなく、郊外の銀座と言ふ處は、本家の銀座に劣らず、商賣のやり難いところです。最初は関西から来た連中が、関西などとは違つて、値段の少し位安い高いは文句を言はないお客様が多いので、あまく見て居たものです。それが此頃では段燈粋と店貨に喰はれて二進も三進も行かなくなつて来ました。一番多い喰べ物店が、鰻屋にしても天婦羅屋にしても支那料理屋にし

も、半とした続きません。その他の店で三年以上続いてゐるのは自分で家を持つてゐる人の店だけと言つて可いやうです。店を仕舞つたあとに、一つ出来、二つ出来したカフエエが、此頃では五六軒おき、近い處では二三軒おき位に出来ました。これが不思議と潰れた。

い。光力つ強い電燈、華美笑後の芝屋の[illegible]花道で役者が目をぱちぱちさせ、人絹で造つた、昔と同じ色合の夜嵐の着をいやに光らせて、昔風の道具をいやに汚く見せる電燈、これを

點け立べた雲哭後の町の間を、うろ校いたやうに暗くさせてゐるのが此カフエエです。

泥の上で蛇の腹のやうにのたうつて強い光力と争つてゐる暗は、狐の嫁入りのやうに明るい商店の行列とこゝろ[illegible]に物悲い間の手は断ち截きてゐます。

この影が殖えれば殖えるほど町は暗くなる。

暗くなれば暗くなるほど影はその踊を踊ることを考へれば、斯んなに殖えた同輩が何故立つて行けるかと言ふことはお合かりになりませ

中野 江藤製

内閣

せう。

主府附近で羞明しいほど明るい政治を行ふ層が立つて以来、めきめきとこれ加担に拡えました。そして、どの店にも毎晩店をしまつてから自動車が時をおいて二芸ほど着きます。そして、店から眉毛を長く引いた、口の真つ赤な人を運び出して行きます。

この町の裏に、古くから家作此邊のを持つてゐる家がありました。昔の大家さんのやうに一番大きな家におさまつて鷹揚な暮しぶりを

見せてゐましたが、やはり御時勢です、殿様の●が算盤を腰にしたやうな政意が、黄金造りの●鋭い一太刀を浴びて、なほ懲りずに中氣の手に算盤と太刀を持ってよぼよぼ立ち上がつた時代に、やはり自分の持家だから、ふさいのに引っ込んで、今迄の家は貸しに出しました。やがて、その堂堂たる門には情ないひよろひよろ文字の標札が二三枚ずらりと懸かって、家の中には鼠のやうに働く智識労働者の一族が這入り込みました。

また、外の小さな一軒には五十近い年輩の下町の[illegible]お棚さの夫婦が住んで居りました。せっせと働いては、僅ばかりの坪数の中に建た自分の家の周囲をぼっぽつ植へて行きました。ちやぼを飼ひ、犬を飼ひ、花を作り、子供のない二人きりの世中もおかない静かな生活をして居りました。此處ばかり落ちついた雨はしとしとと降り、日はいつも靄かに照るやうに見えました。

それが、同じ昨年の夏、その家を抵當に金

（ 2 ）

を借りてゐた先からせつかれると言ふので、當分は友達の店の二階を貸して貰ふのだと言つて引移して行きました。

そのあとへ来たのは筋肉労働者です。お芋の煮えたのも御存知ない大學者達が、自分達の穴を掘る穴を掘る序に、此人を此處に据ゑたのでした。

で二人の男の子を大事に育ててゐたその隣の小さな洋館に若夫婦は、それから間もなく、餘處へ移つてしまひました。

働かざるもの喰ふべからず。

分類的 1²

斯うして、強力の電燈と、唇が嗄れた無遠慮な聲を出すラヂオと、泥と、泥の上に黒い虹を描く機械油と、物凄い化粧の女と、主婦のアナウンサアの使用する恐ろしい日本語と、同じ恐ろしく正しいピアノと言ふ機械の出す音に恐ろしく合つた調子と、生まれつきの喉を恐ろしく發揮する歌ひ手と、南の國の良いの木の油でかためた菓子と、昔は赤道の南で嘶いたことのある近江の國の牛肉と、帝國の大切な輸出品を片時も忘れさせまいと

國籍不明の歌と、

踊る、踊る、

努力する[illegible]の高い[illegible]と。

かをり

揺れる、揺れる、貨物自働車の地響に、[illegible]の左右に聳えてゐる壁とブリキが、[illegible]る[illegible]倍[illegible]のいたづらのやうに石や銅のつもりにしてゐい[illegible]

た愉快な校[illegible]が、[illegible]

[illegible]歌[illegible]謎[illegible]

いつも五つの[illegible]を上げ下げしてゐる歌に合はせて。

音

（一九三〇年三月十七日）

中野江藤製